参考資料：岡山縣上道郡古都村史、現代古都の郷、ふるさと古都
岡山史蹟めぐり（岡山市立西大寺公民館古都分館）、岡山市の地名

満願寺慈眼院（まんがんじじげんいん）

南方の室山満願寺は備前 48 ケ寺の一つと考えられている。
奈良時代に僧鑑真によって創建されたものと伝えられている。

満願寺は南方の奥、室山の非常に静かな地にあって、東西及び南は芥子山々塊の丘陵に取囲まれている。修行の道場としては好適の地といえよう。平安、鎌倉時代のことは寺にこれを知る何の史料もなく一切不明である。わずかに寺の口伝によれば鎌倉時代末正和年中（1312-1316）に火災があり寺内の建物を多く焼失したといわれている。

現存の本堂は江戸時代中頃に建設されたもので、ご本尊の千手観音は鎌倉時代中期の榧(かや)の木像である。庇の階段左右には寄木造り脱乾漆の金剛力士像が鎮座している。これは、明治 20 年代まで仁王門に置かれていた力作である。

本堂南側の祖師堂は、江戸時代に慈眼院と安楽院に使われていた材木を用いて改築されたものであり、現存する慈眼院のご本尊は大日如来である。

室町時代には金陵山西大寺の末寺になったといえる。

本堂の後には、会陽の創始者忠阿上人の墓と伝えられる一石造りの五輪塔がある。

忠阿上人（ちゅうあしょうにん）の五輪の塔

忠阿上人が西大寺修正会、即ち会陽の際宝木の授与を始めたといわれている。

会陽は西大寺の寺伝に従えば旧暦正月元旦より 14 日間観世音菩薩の仏前で秘法を修し、国家安穏、四民繁栄の祈祷を行うのである。この法会は西大寺が創建せられて以来行われてきた。
しかしこの法会に際し参拝者に別の宝木を授けるようなことはなかったが、今から 400 年前、室町時代永正年間に西大寺の住職忠阿上人がこの法会の結願の日の夜、宝前の宝木を参拝者に授けるようになった。

当時は信徒中の選ばれた者にのみ授けられたが、次第に信徒参拝者がこれを

参考資料：岡山縣上道郡古都村史、現代古都の郷、ふるさと古都
岡山史蹟めぐり（岡山市立西大寺公民館古都分館）、岡山市の地名

授与を希望するようになった結果、はじめはくじによったが後、参拝者の群れの中に投ずるようになったといわれている。（沼田頼輔述「西大寺考」）

忠阿上人が室町時代の永正年間西大寺にあって、寺家の再興に努力し、今日の宝木を参拝者に授与するようになったこと以外、上人の詳しい伝記は不明である。

満願寺境内に上人の墓と伝えられる五輪塔があるが、満願寺が室町時代には西大寺の末寺であったので、上人が満願寺に止住したことがあったとも考えられよう。そのため上人の墓所がここにつくられたといえよう。
（巌津政右衛門氏の意見によればこの五輪塔は形式から考えて室町時代のものと考えて誤なく、なかなか整ったものである）